願成寺報

平成二十七年三月十五日

〒四四〇・〇八一二　豊橋市東新町二十八番地
☎ 〇五三二・五二・九六〇一

■ 春季彼岸・永代経のご案内

今このままを慶ぶことが 仏様への報恩です
そのままの慶びを ご一緒に 見つめ直しましょう

○餅つき・草取り会

恒例になりました。
春き立てのお餅をオヤツにします。
楽しい会になっています。
仲間が増えればもっと楽しい！
是非、ご参加下さい。

三月　十九日（木）　午後一時　餅つき・草取り会
二十日（金）　午後一時半　法要のみ
二十一日（祝）　午前十時　法要・落語、法話
成田屋紫蝶 師、住職
正午　お斎（昼食）
午後一時　法要・落語、法話
成田屋紫蝶 師、住職

「落語は業の肯定である（立川談志）」

「分かっちゃいるけど止められない」行いを業と呼ぶのでしょう。
お互いに業を持つ身で、捨てられないから傷つけ合って、
ギスギスして、孤独になったり凶暴になったりしています。
捨てられないなら笑い飛ばしてしまえ…
「お互い様じゃないのか、皆で笑って許し合おう」
そんな智慧が寄席にはあるのだと思います。
一つの噺に笑い合い、伝え合う連帯感がいいんだナ。
笑いの中で、我々を我らと観ていく感性が育つと思います。
この感性が大事なんだナ。
業ある身を自覚し、受け止めるのは独りぼっちじゃ無理ですから。
それは諸仏を観る感性に繋がります。
そして諸仏は、その業を縁に弥陀に任せよと勧めています。
泣き笑いするそのままで、お任せしますと頷けます。

願力無窮ニマシマセバ　罪業深重オモカラズ
佛智無辺ニマシマセバ　散乱放逸モステラレズ
《正像末法和讃・親鸞聖人》

成田屋紫蝶（なりたや しちょう）　師

豊橋天狗連の大御所
大きな寄席で大トリをとる実力者
古典の腕前はプロをも凌駕する？

ダンディな色気も魅力の一つ

市長にはならなかったが、
福祉団体の重役を務めている

住職もお世話になっており、
大入りにならないとマズイかも…
住職を助けると思って
まずはご来場（ご聴聞）下さい

♪昨年に続いてのご出演です
宜しくお願い申し上げます

●正信偈ノート⑭・竜樹章Ⅱ

書き直しを恐れず、今、思い浮かぶところを書き留める

黄色の勤行本の二十七ページから

宣説大乗無上法　証歓喜地生安楽
顕示難行陸路苦　信楽易行水道楽

大乗無上の法を宣説し、歓喜地を証して安楽に生ぜんと。
難行の陸路、苦しきことを顕示して、
易行の水道、楽しきことを信楽せしむ。

・大乗の法　自身の悟りと一切衆生の救済を共に求める法
菩薩が仏に至るための五十二階位の四十一位目
・歓喜地　十地経で説く初地の位
不退の位と別称し、下位に落ちることがなくなる位
真実の一部を悟り、心が大いに歓喜する
・安楽　阿弥陀浄土のこと
・難行　身情意に不断の修行を要する、自力聖道門の行法
・易行　身情意で弥陀仏の本願に頷く、他力浄土門の行法
・信楽　如来の働きを感じ・頷き・任せること

（注筆者）

〈浄土真宗本願寺派・注釈版聖典より〉

・竜樹の菩薩道

竜樹菩薩はその才覚に不断の修行を重ね、歓喜地に至った希有の行者です。竜樹は修行の経験を『十住毘婆沙論』に著しますが、その中の『易行品』に難易二行が説かれています。

難行道とは、布施・持戒・忍辱など諸善万行を精進して菩薩の階位を登る坂道である。一瞬の油断で退転してしまう危険をはらみ、成果が遠いため初心を忘れ、自己満足に堕す者も出る。

易行道は、信方便の易行と云われ、阿弥陀仏の本願に身・いのちを預けて船旅のように往く道である。ただし、自身への拘りの強い行者には、自力の信が障害となり、選び難い道となる。

竜樹菩薩には、その才覚故に難行の時間が長かったことと思います。その長い御苦労の中で自力無効を証し、信方便の易行・浄土の法門を『仏説無量寿経』に依って開かれました。

親鸞聖人は、万人を等しく済うこの法こそ大乗中の無上の法と戴かれました。阿弥陀の願船から「こっちだぞ」と呼びかける竜樹菩薩の声を、頼もしく聞いておられたことでしょう。

・余談（大乗☆『我ら』という船）

『仏説無量寿経・巻下』では、迷いの姿を多様に表現しますが、「愛欲之中　独生独死　独去独来」と、自己愛によって逆に孤独に沈む苦を記しています。

この苦を断つには、迷いを縁に、他を想う心を養うより他ありません。特別なエリートとして万能の力を奮い友を救うのでなく、共に迷う仲間として朋を見出し支え合うこと。自己愛のぶつかり合う『我々』ではなく、自己愛を溶かし合い『我ら』を見出しながら歩むことが求められます。

迷いにおいて繋がる『我ら』に敵はありません。出合った全てを御同朋と受け入れ、安堵し、敬愛しながら課題に取り組めば良いのでしょう。真摯な姿が伝わり合って拝み合えれば、迷いのはたらきが、苦から慶へ転じられている事に気付くでしょう。

理屈は一応納得しても、実践は難しいようです。迷いの自覚が第一ですが、夢の中でそれを夢と知るのが難しいように、迷いの最中では苦の正体を見破ることができません。

自分で目覚めることが出来ないのだから、弥陀の本願に呼び覚まされることがカギであり、お念仏をお勧めする由縁です。

創作・舎利弗尊者の献身

阿弥陀経で釈尊から何度も呼びかけられる舎利弗尊者は、真宗でもお馴染みの仏弟子です。智慧第一と称される尊者は、釈尊の心の朋であり、別れの場面では釈尊も激しく落涙されたようです。

尊者は、豊かな村の名家の長男として産まれました。聡明博学な父母の薫陶を受け、幼い頃からその才覚は近隣諸国まで鳴り響いていたそうです。両親は家を継ぐ者として、将来を大きく期待していたことでしょう。

しかし、尊者は世の無常を憂い、真理を求めて出家する決断をします。出家とは、家や財産・家族を捨てて、新たな家庭も作らず乞食同然の暮しをすることです。人並み以上の孝行をしてくれる筈の子から捨てられる両親の失望は想像に余ります。特に母の悲しみが大きかったのでしょう。尊者は、その悲しみを深く心に刻み、母・舎利の子（＝舎利弗）と名告られました。

尊者ははじめ懐疑論者のサンジャヤに学びましたが満足できず、やがて釈尊に出会われます。そしてその教えに大きく頷き、四十年余、事に応じて真理の世界を探究されました。

釈尊より年長の説もありますが、八十歳になった頃、尊者は自身の死期を悟り、故郷に帰りたいと申し出ます。釈尊や仲間達に丁寧に別れを告げ、衰えた体力で故郷へ帰ります。そして、出家の成果を説き終り、静かに母を抱きました。

母は釈尊を憎んでいたと思います。百歳を越えて待ち続けた事実が執念を語ります。しかし、子の充実した生涯に接し、凍りついた我執が溶けました。尊者は母の慶びを観てやっと安堵し、涅槃に入られたということです。

〈『ブッダとその弟子 89 の物語』菅沼晃著 より創作〉

永代供養【私見？】

・最近の傾向

インターネットで検索するとお墓の事ばかりが出てきます。五十年程度を目安に、寺院等が管理を保証する墓のこと。永代供養墓と云うようです。

永代が五十年となり、供養が管理に変わっています。保証も管理寺院等の存続が前提ですので注意が必要です。

・供養

供養は、誰が何のためにする事なのか、問い直したいと思います。聖者や亡き人・祖先を敬い・施しをすることが供養です。本来は、布施行に数えられ、施主に敬いの徳が具わる善行でした。けれど世間では、追善を重視します。

追善供養では、亡き人・供養先の安楽が財施等の目的です。施物の多寡が安楽の度合いを決めるとしたら… 心配が残ります。

真宗においては、亡き人の安楽は阿弥陀仏により保証されており、その意味での追善は必要ありません。

けれど、敬いの徳については重視します。

・恭敬と永代経

敬う私が敬われている。いのちの尊厳に気付く行いが恭敬です。我儘な愚痴ばかりであった私に、慶びが具わる大切な行いです。誰かが肩代わりできる行でなく、施物の多寡も気にしません。迷う毎に照らされ直す恭敬を大切に営みたいと思います。

尊い教えと・頷く姿を永代に残そうとするのが永代経です。子孫にも永代に亘ってこの慶びが伝わるように営みます。施物は教えの道場たる寺院の護持に活用されます。

永代経と永代供養、どちらも継続的な恭敬供養が大切です。

行事予定　～平成二十七年～

月例会の開催日・開始時間を変更しました、ご注意下さい。

三月　二十一日（土・祝）　春季彼岸・永代経法会（成田屋紫蝶　師）
落語と法話で楽しく過ごします
お非時（昼食）あり
午前十時～

八月　十五日（　土　）　お盆・歓喜絵（住職）
法要・法話で泣き人を偲びます
軽食・花火あり
午後六時～

九月　二十三日（水・祝）　秋季彼岸・永代経法会（戸田恵信　師）
お馴染みの先生の情熱的な法話です
お非時（昼食）あり
午前十時～

十一月　三　日（火・祝）　本山納骨堂法会・団体参拝
本山へ貸切バスにて団体参拝します
午前七時ごろ集合

十二月　五　日（　土　）　報恩講
六　日（　日　）
御開山聖人御恩に報いる法会です
お非時（昼食）あり
五日　午後一時半から
六日　午前十時から

二～十二月　第一火曜日　月例会
毎月一日だったのを変更しました
参加者が減っていますが　続けます
午後一時半～

●本山一光三尊佛御開扉法会（中開帳）他ご案内
四月三日～十日　法会と特別講演他・高田本山専修寺
五月十日まで　「専修寺の至宝」展・三重県総合博物館

‡　後　記　‡

○イスラム国の蛮行以降、暗いニュースばかりが頭に残ります。
「どうしてそんなことを…」と憤りますが、
「お前は絶対やらないか」と問われたら、少し不安です。
腹立ち紛れに物を壊したことも一度ではありません。
それ程大人しい人間でもなさそうです。
「さるべき業縁のもよおせば、いかなる振る舞いもすべし」
親鸞聖人のお示しを、心して聞かねばなりません。

○群雄割拠の時代では、一族惨殺の悲劇が数多く記録されています。
この国にも血と涙の歴史があったこと、心に留めておくべきです。
勢至丸は九歳の時、敵対勢力の夜討にあって父を殺害されます。
「敵を恨まず仏門に帰し菩提を弔え。迷いを離れ救いを求めよ」
勢至丸は、父の遺言に、仇討ちを止まり、出家します。
やがて法然房源空と名告り、念仏往生の道を開かれました。
承元の法難では、法然門下の四名が冤罪により刑死しています。
「主上臣下　法に背き義に違し　忿を成し　怨を結ぶ…」
親鸞聖人はこの事件を憤りをもって記されました。
その憤りは、後鳥羽上皇他の具体的な誰かへではなく、
世の迷いの方向へ向かわれたことと思います。
「世の中安穏なれ、仏法ひろまれ」晩年の手紙に書かれています。
世の迷いが業縁となって人の心を乱すのだ。
世の中を安穏に保つには、迷いを迷いと教える法に依るしかない。
仏法ひろまれ。

○『正信偈』は八百年前、親鸞聖人により制作されました。
五百年前に本願寺・蓮如上人が出版し、
以来お仏壇に供えられ、読み伝えられて来ています。
読謡すると、沢山の方々の其々の想いにふれる気が致します。
「世の中安穏なれ、仏法ひろまれ」と響いています。